

## 透析医療をになうスタッフ確保の重要性

(社) 日本透析医会  
常任理事 太田圭洋

最近、透析医療に携わる人的スタッフの不足の声をよく聞くようになってきました。もっともよく聞くのは透析医の不足です。後任医師の確保ができず維持透析患者をほかの内科医が片手間に診ざるをえなくなった病院や、患者を近くの透析施設に紹介しクリニックを閉鎖した例も出てきています。また、透析クリニックでも、医師1人当たりの受け持ち透析患者数が増加し、悲鳴を上げ始めた若手の医者も知っています。

現在、約1万人の透析患者が毎年増加しています。1人の透析医が主治医として管理できる患者数を100人と仮定した場合（これもけっこう大変ですが）、日本全体で毎年100人の透析医が純増していなければ、透析医療を担う医師は人的な面で手薄になっているといえます。すなわち人口120万人に1人。私の住む愛知県は約720万人の人口ですので、毎年6人、新しくフル勤務の透析医が増加している必要があるのですが、周りを見渡してもどうもそうはなっていないように思います。今後は、透析第一世代のリタイアが急激に進行することが確実です。毎年さらに多くの透析医を確保していかなければ、どんどん患者ケアが手薄になっていく状況にあります。

看護師の不足も医師に負けず劣らず深刻です。今年の診療報酬改定で、病院の看護基準の見直しが行われました。一般病床での7対1看護の新設をうけ、多くの急性期病院が看護師募集をこぞって行っているため、現在の看護師の労働市場はいまだかつて日本の医療が経験したことが無い不足状態が生じています。その結果、透析医療にも大きな影響が出始めています。

まず問題となるのが中小の民間病院です。日本の維持透析は、中小の民間病院および有床診療所、無床診療所が中心です。その中で、透析患者の急性増悪や合併症に対応してきた中小病院での病棟看護師の不足が顕在化してきています。大学病院や公立・公的の大病院と対抗できず、来年度の募集が十分に集まらないだけでなく、中途退職が進み病棟維持が困難となる病院がでてきています。この流れが進むと透析患者の急変時の受け入れ先に影響がでてくることが予想されます。

また外来維持透析も、全体的な看護師不足の中、徐々に募集が難しくなっているように思います。今後、全自動コンソール等、機械の進歩による省力化が見込めるとしても、患者の高齢化の結果、透析患者の層は重篤化がすすむことが確実です。毎年1万人増える重篤な透析患者を支えていく看護スタッフを、この異常な看護師不足の中で確保していくことは容易なことではありません。

医療は人が行うものです。マスコミや官僚は、箱や制度ができればよい医療が提供されると思っておられる方が多いようです。その結果、立派な自治体立病院や〇〇センターなるものが造られます。しかし、どんなに立派な建物や機械があっても、どんなに見た目、機能しそうな制度ができて、医療スタッフがいなければ医療は提供されません。ましてや質の高い医療を提供するためには十分なマンパワーの確保が不可欠です。最近の医師不足・看護師不足で診療科や病棟が閉鎖された

り、救急受け入れが停止したりしているニュースをみるにつけ、医療は人であるにつくづく思います。

このような全国的な医療スタッフ不足の中で、透析医療は今後どうなっていくのでしょうか。日本全体としては、少子化の影響で、労働生産年齢人口が徐々に減っていくことは確実です。その貴重な若手の労働力を透析医療に導いてくることは容易なことではありません。しかし人的確保無しでは、どこかで日本の透析は臨界点を超え崩壊してしまいます。日本の透析医療に携わるすべての人が、積極的に透析医療の魅力をアピールし、1人でも多くの医師・看護師が透析医療に加わっていただけるよう努力していく時期にきていると思います。